勝沼氏館跡調査概報 II

山梨県教育委員会
勝沼町教育委員会
勝沼氏館跡調査団

目　　次

序……1

1．　A，B，C区調査の
大要とD区の調査経過……2

2．　勝沼氏をめぐる史料……5

3．　層　序……7

4．　D区の遺構……11

(1)　土塁址・土塁脇溝址

(2)　門址・広場址

(3)　建物址

(4)　溝址・水溜址

(5)　小鍛冶状遺構

(6)　その他の遺構

5．　D区の遺物……19

(1)　陶磁器

(2)　土師質土器

(3)　瓦質土器

(4)　金属製品

(5)　溶融物付着土器等

(6)　漆　器

(7)　古　銭

(8)　その他の遺物

6．　付　記……23

表紙の写真

D区の調査風景。なおD区の排土は将来の整備計画を勘案して検出した土塁の基底部上に盛土をした。

例　　言

1．本書は、山梨県東山梨郡勝沼町勝沼字御所に所在する勝沼氏館跡の調査概報第2集である。

1．調査は、山梨県教育委員会ならびに勝沼町教育委員会が調査主体となり、勝沼氏館跡調査団が調査を担当したものである。

1．本書の内容は、第5・6次のD区の発掘調査を主とし、他の関連調査も若干取り入れてある。

1．本書の編集は、勝沼氏館跡調査団編集委員会が担当した。

1．本書の執筆は、勝沼氏館跡調査団考古班が主として担当し、他に調査参加者の協力を得た。執筆者は次の通りである。

出月洋文、猪股喜彦、上野晴朗、小野正文、折井忠義、数野雅彦、小池剛、佐藤元、田代孝、土屋政司、萩原三雄、早川方明、室伏徹、森和敏、八巻与志夫、渡辺孝子、渡辺礼一

1．報文中使用する遺構名称については、平城京調査方式にならい、それに若干加味した。

数字は遺構番号であるが必ずしも連続しない。

S＝遺構	D＝溝	P＝水溜
B＝建物	Z＝集石	A＝土塁
H＝堀	X＝不明	C＝広場

（例）　SD－01
遺構 溝 番号

1．遺構、遺物等の名称について先の概報と若干異なる点もあるが、用途や機能が確定できるものに関してはこれを変更し、使用している。

序

昭和50年３月、勝沼氏館跡調査概報が発刊されました。これによって関係者、町県民各位には館跡の状況や価値についてご理解をいただいたことと思います。

調査はその後も引続いて行われ、主として館跡内郭部西側地区（Ｄ区）の発掘調査を進めておりましたがここで一応これをまとめて概報第２集として発刊することになりました。

この調査によってさらに貴重な各種遺構や遺物を検出いたしました。これらは我が国、中世館跡を解明するうえに極めて貴重なものであるといわれ関係者から高く評価されております。

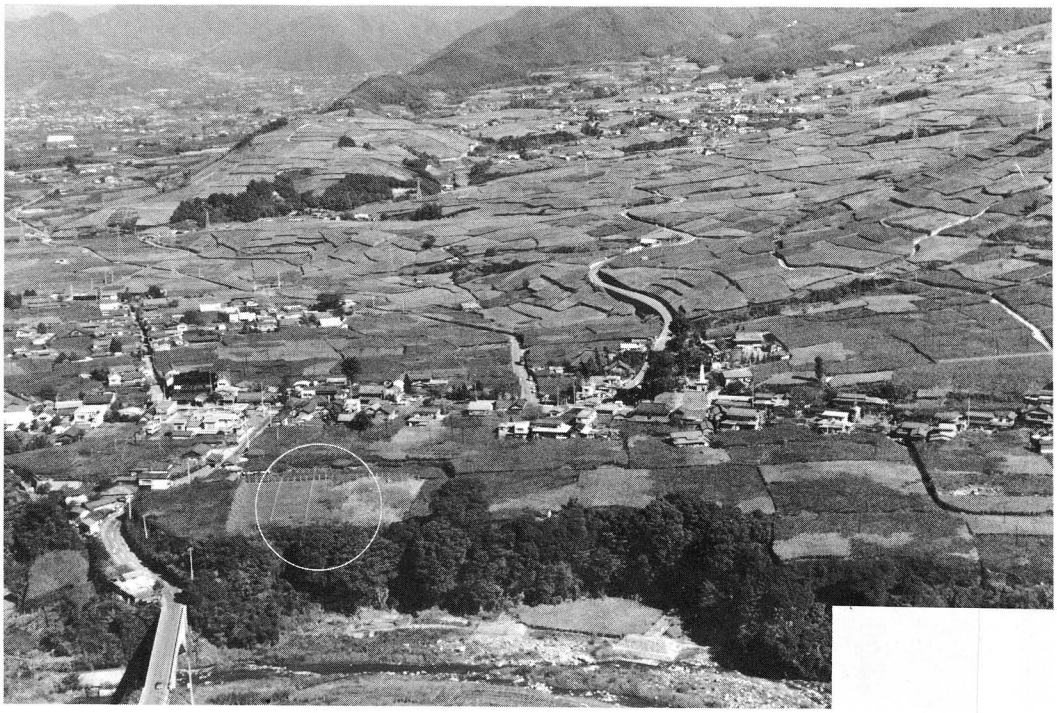
なお、今後も調査は続行されその完了をまって調査団によって内容が明らかにされ詳細な報告書も刊行されることと思います。

この貴重な文化遺産に対しては町、町民が認識を深め広く県内外に対し顕彰されるよう努力すると共に関係各位にもこのことをお願いいたす次第です。

ここに第２集を発刊するに当り勝沼氏館跡調査団、発掘参加者をはじめ、県、地元関係者に対し深甚な感謝を申しあげてあいさつといたします。

昭和５２年３月３１日

勝沼町教育長　上　矢　龍　男



PL.Ⅰ　遺跡遠景

1．A、B、C区調査の大要とD区の調査経過

昭和48年12月から開始された勝沼氏館跡の調査は現在までに6次の調査を数えている。既に先の概報において、第4次までの調査の区域すなわちA、B、C区についてはその内容の大要を報告してきた。

A、B区においてはいずれも礎石を用いる比較的大規模な建物址群やそれをとりまく溝址あるいは水溜址が検出され、更に内堀に沿って土塁が構築され、その内側には溝をめぐらしている。また、随所に石組などを利用した防御的施設なども見うけられる。そのほか、特異な遺構とすればＳＸ－17と称する内郭の機能をわける土塁の基底部的な施設や庭園状遺構、集石なども存在している。

遺物の多くはA区の大型建物址、溝址などを中心にして検出されている。そのなかで最も出土の多いのは土師質土器であり、これらは煤等の付着から灯明皿として使用されたものが多い。陶磁器類の出土も比較的多い。なかでも美濃瀬戸系の灰釉小皿が多く、時期決定の重要な資料となっている。 内・外耳形土器や摺鉢などの日常雑器もある。その他の遺物としては金属製品としての釘類、カナバシ、鋤先、鉄砲玉などみられる。硯、茶臼、古銭、骨角器類などもある。なお、これらの遺物の他に時代のまったく異なる縄文土器等もある。

さて、本館跡は昭和48年暮の第1次調査（予備調査）、49年1月の第2次調査の結果が明らかになるにつれて、その重要性、貴重性が叫けばれるようになり、また圧倒的な県民、町民の熱意によって最終的に内郭部は全面保存が決定された。そして、当初建設予定の県立ワインセンターは外郭の一角、調査区域ではC区と呼称されている地点に建設を変更された。

C区は現県立ワインセンターの敷地内で館跡外郭部にあたる。ここの調査においても内郭部と同様に溝址や水溜址を確認したが、建物址の検出はない。しかし、特記すべきこととして、内堀と並行する形で新たに堀址と土塁址が検出されたことがあげられる。すなわち、内郭部とC区の間には二つの堀と二つの土塁が存在したことになり、いわゆる二重堀の様相を呈していることが明らかになったのである。

なお、出土遺物は比較的少ない。

このように、第4次までの調査によって、内郭部の様相が次第に明らかになってきたわけであるが、同時に、館跡内郭部の遺構はそれぞれ複雑に重複していることも明らかになってきた。例えば、A、B区の溝址や水溜址あるいは建物址等は重複が随所にみられ、B区においても同様なことがう

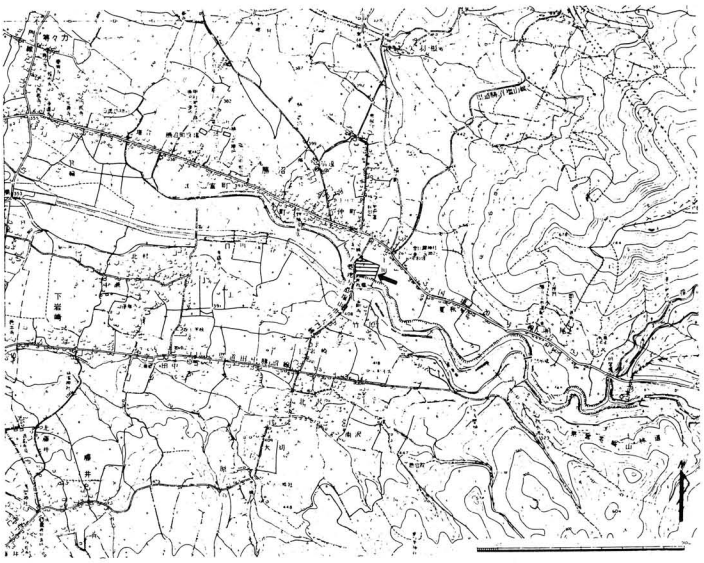


Fig.1　勝沼氏館跡位置図

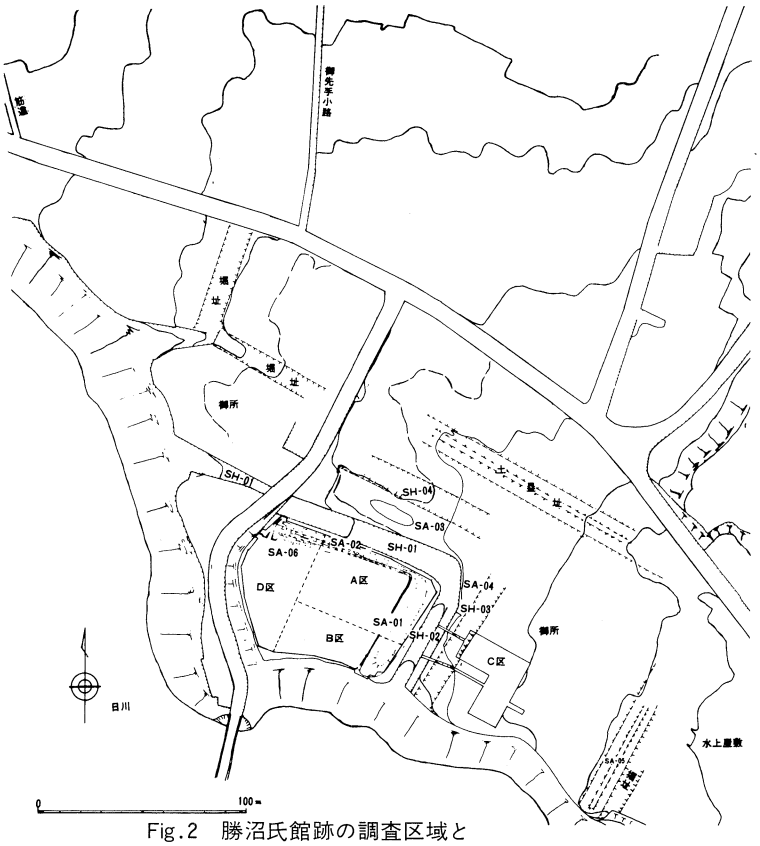


Fig.2　勝沼氏館跡の調査区域と
周辺の土塁(ＳＡ)、堀(ＳＨ)

かがえる。こうした状況は調査を複雑にしてきた反面、館跡の変遷を裏づけるものとして重要な内容を包蔵しているといえる。

第５次以降の館跡の調査すなわちＤ区の調査での大きな課題は、未検出の遺構の確認と共に遺構間の重複を分折、整理し、各時期ごとの遺構の概要並びに変遷を確実に把握することにあった。このためＤ区の調査ではグリッド方式により遺構の全体の確認を行うとともに、更に東西、南北に三本のトレンチを設定し、深掘りをして層的確認を進めた。

第５次発掘調査

49年10月30日から行われてきた第５次発掘を50年３月20日から再開した。この調査ではＤ区における遺構の全容の確認と古くから太鼓櫓があったと伝えられている地点の調査・確認にその主力を置いた。

その結果、ＳＤ－22の溝址やＳＰ－05の水溜址、ＳＸ－45の門址、ＳＢ－16、17等の建物址群など遺構の概略を確認することができた。また、Ｎ１Ｗ７グリッドを中心とする地区は広範囲にわたって遺構の検出はされず、しかも地表が踏み固められた状況が確認されたため、広場的な機能をもつ遺構（ＳＣ－01）と判断した。

出土遺物は調査区域から土師質土器、陶磁器、金属製品等が検出された。特に、ＳＰ－05の水溜址からは溶融物付着土器が多く検出された。

なお、Ｄ区においてもＡ、Ｂ区と同様に、遺構間の重複がみられたため、部分的にトレンチを設定し、層位的調査を試みた。

第６次発掘調査

50年７月10日から調査を開始した。本調査では館跡の歴史的変遷を把握するために、Ｗ５ベルトの東側及びＮ２ベルト北側にトレンチを設定し、その精査を進めていくとともに各遺構の検出及び精査を主眼とした。

館跡西北隅に石垣で構築された門址は重複関係が明瞭となり、建て替えが行われていることが判明、またこれに付随する石列や敷石遺構なども比較的良好な形で検出することができた。太鼓櫓については今回の調査では結局遺構の検出はみられなかった。なお、Ｄ区土塁基底部上からは縄文期の住居址が発見されたため、この調査も付随して

行った。

館跡内の層序の調査においては、およそ三つの歴史地表面が認められ、この結果、館跡は少なくとも３回の変遷をたどっていることが想定された。

９月９日、ベルトと若干の遺構の精査を残していったん調査を終了し、翌51年３月24日から同29日までの期間土層図の作成を行った。また同年７月21日から引き続き土層図の作成、溝址、水溜址など残された遺構の精査も行い、８月６日に第６次調査は終了した。

出土遺物の主なものは土師質土器、瓦質土器、陶磁器等であるが、最下層遺構から検出した土師質土器は上層の遺構のそれと比較し、形態的に若干の相違が見られた。

そのほか、考古学調査と並行して、付近の寺院などが所蔵する文書等の史料調査も行った。調査終了後、図面、遺物などの整理を継続して行っている。

①内郭部
②Ｃ区（東の郭）
③日　川
④水上屋敷
⑤尾崎明神
⑥甲州街道（国道20号線）
⑦御先手小路
⑧筋　違
⑨西北の郭

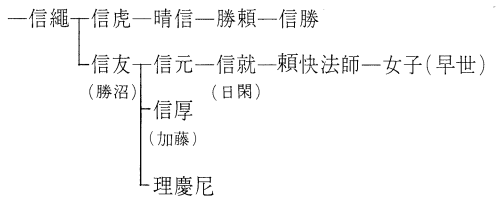
PL. 2　勝沼氏館跡全景

2．勝沼氏をめぐる史料

先の勝沼氏館跡調査概報において、勝沼氏は本宗武田氏によって永禄３年11月滅ぼされたため、史料の湮滅をうけて、古文書の一等史料が残念ながらないことを指摘してきた。しかし甲陽軍鑑を始めとして、傍証史料は意外に多く、その記録によってある程度の勝沼氏の歴史的経過は理解できることを示してきた。

そこで今回はさらに甲斐国志・社記・寺記などに伝える勝沼氏関係の記録を取上げて検討を加えてみたい。

武　田　系　図　（勝　沼　氏）



国志仏寺部第３の祐徳山泉勝院の記録をまず掲げてみる。

「泉勝院　曹洞宗小佐手東林院末黒印六百坪、境内弐町壱町半、本堂九間五間半、本尊釈迦、開基ハ勝沼氏ノ局勝月院誓庵理鳳大姉弘治三年丁巳二月十日逝、又福正院殿光山輝公大禅定門、長遠寺殿快翁道俊大禅定門の牌子アリ、称二勝沼殿一崇正院殿華岳妙栄大姉ヲ後ノ開基ト云、古ノ開山ハ不二分明一、今本寺三世ヲ勧請セリ、寺宝ニ勝沼氏ノ遺器トテ饌具、行厨、食箱、偏提等ニ三階菱或ハ圏内ニ花菱オ亀甲ノ上ニ重ネツケタルアリ」

と見えている。泉勝院は周知のように、勝沼氏館跡の縄張りに当って、御先手小路の先端に位置づけられて設けられた、勝沼氏の開基寺なのであるが、文中に見える４人の牌子は幸い同寺に現存する。しかし寺宝の勝沼氏の遺品の方は、火災に逢ったため残念ながら残されていない。現存していれば、他の多くの武田氏遺品と対比でき貴重なものだったと思えるが残念である。しかしこの記録によって勝沼氏の家紋が、本宗にあやかって三階菱、或は圏内に花菱を描いていることがわかり注目される。また牌子の人物は、泉勝院の記録では、長遠寺殿快翁道俊大禅定門は勝沼信友、勝月院殿誓庵理鳳大姉が勝沼信友の夫人、福正院殿光山禅公大禅定門は武田信正（マヽ）、崇正院殿華岳妙栄大姉を武田信繩夫人としている。福正院殿は或は信昌の誤りであろうか。

いずれにしても次郎五郎信友、あるいは信虎にとってゆかりの人々が牌子となって祀られていることは、泉勝院が勝沼氏にとって由縁の深い寺だったことが知られる。なお長遠寺というのは泉勝院のある地域の小字で、二つの寺がもと同じものであったことを伝えている。

次に同じ御先手小路にある威徳院の由緒書（寺記四巻８９５頁）には、

「抑当院之儀ハ弘治元年勝沼五郎入道建立シテ暁歓法印開基開山ニシテ和州桜本直同行シテ代々当山修験相勤罷在候……」

と、見えている。当院の本尊は武田氏ゆかりの不動尊と伝えており、これを守護する法印辺見家の由緒を見ると、武田信重の子信連をもって先祖とし、勝沼氏は信連四世の孫であると説いている。齟齬するものが多いと思われるが、昔から勝沼氏を強調している点興味深い。

次に同じ勝沼にある新義真言宗の海蔵院の由緒を掲げてみる。寺記二巻92頁に

「……依号勝尾山海蔵院求聞寺と、或は理慶寺共云、然後勝沼殿居城鬼門除鎮守為別当故ニ勝沼殿代々祈願所と云、其後勝沼五郎朝信（マヽ）殿之長女松之葉君ハ岩崎郷なる雨宮氏江嫁候後父朝信（マヽ）殿叛逆之依有聞松之葉君茂妻子珍宝及王位臨命終時不随者之大集経之要文ヲ早ク識リ給為亡父朝信孕身

之儘柏尾山の護摩堂阿闍梨憑慶紹ニ落髪して慶樹(マヽ)庵理慶尼ト号後当寺ニ長ク住居ス、依理慶寺共云尼君孕子柏尾山ニ雨宮ト申氏あり、彼尼之一子跡と申伝也。(以下略)」

と見えている。処々に誤記が認められるが、海蔵院が勝沼氏館跡の鬼門除鎮守として位置づけられていたこと。その祈願所のゆかりをもって理慶尼が一時この寺に住居したことなどを伝えているのである。なお国志仏寺部も海蔵院が勝沼氏の祈願所であったことを認めている。

理慶尼については、そのゆかりの寺大善寺の由緒書には次の如く見えている。

「理慶比丘尼墓　慶長十六年辛亥八月十七日寂勝沼入道の息女也、雨宮何某に嫁し無程入道叛逆の旨、露顕に及ひけるゆへ雨宮も其罪を逃れんため離縁す、時に息女妊身也、当山護摩堂の阿闍梨慶珎に従い尼となる。其子孫代々当村に居住し、寺家を守護す、理慶の筆仮名文弐巻家に伝ふ。従者四人今猶其末孫在

久保田傅兵衛　佐藤源十郎　水上半助

飯室杢左衛門」

とあり、骨子はほぼ海蔵院のものと変らない。ただ、ここで判ることは有名な理慶尼記は、その子孫が保管していたということである。

次に勝沼町勝沼の雀宮明神（鈴宮神社）の社記を見ると、勝沼五郎奉納の首鎧一刎、太刀一口があったと記録している。奉納の品であるが、これも残念ながら現存していない。しかし雀宮が氏神として扱われていた様子は窺える。

甲斐国志人物部の勝沼村の原氏の記録も興味深い。

「原氏（勝沼村）村長小左衛門所蔵五月十三日年号未考勝頼花押書翰一章原隼人佑殿トアリ、小左衛門其胤也ト云、良薬一法ヲ伝フ、金瘡打傷ニ験アリ、伝書ノ跋云、郡内小山田ノ家人河村備後ト云モノ弩ニ中リ臑ヲ打折リタルニ根津殿

PL. 3　菩提寺　泉勝院

ノ薬ヲ与ヘラレテ不日ニ愈エシカバ穴山殿所望シテ、五拾貫文ノ加恩ニ替ヘテ伝授アリ、之ヲ勝沼殿ニ伝ヘ勝沼五郎殿ノ娘原隼人ヘ嫁スル時、聟引出モノトシテ隼人ニ伝ヘラルトアリ」

と、いうのであるが、勝沼五郎の娘が原隼人佑のもとへ嫁いだというのは興味深い材料である。隼人佑は甲府高畑の名族原加賀守の子で、婚姻関係としては遜色ない相手である。

このような材料では甲国聞書という記録にも認められる。

「小狐と云太刀は今府中八幡宮に有之と云、此由来は曽我五郎箱根権現に籠たる太刀也ト云、箱根別当勝沼殿を聟にして、聟引出にする。其後勝沼殿逸見殿を聟にして、又聟引出物に逸見へ遣す……」

と、見えているのである。そのほか甲陽軍鑑は、信玄が勝沼氏の娘を妾にしたことを伝えているけれども、それを受けたように武田源氏一流系図(系図綜覧本)は、お菊御料人のあとへお松御料人を載せ、「母勝沼入道女永禄十年十二月（七歳）約織田城介信忠、其後不嫁為尼、号新御館比丘尼……」としているけれども、信疑はともかくとして、勝沼氏の娘を信玄が側室としたというのは、興味深い材料である。

いずれにしても、以上瞥見してきた諸史料は巷間にあるものまで含めて、江戸時代も割に古い時期から語り伝えられたものが多く、今後はその分析検討を進めなければならない。

3．層　　序

第１次、第２次のＡ区の調査において、内郭部の遺構群はごく単純に単一の時期から成りたつものではなく、例えばＳＤ－04と05の重複関係、ＳＰ－01とその側石を再使用しながらの溝あるいはＳＢ－02、03付近の下層の建物の存在などにみられるように、少なくとも２時期の変遷を経ていることが確認された。そして、それぞれの遺構群を大略的に上層遺構、下層遺構群として把握してきた経緯があった。続いて行われたＢ区の第４次調査においては、さらに加えて、ＳＢ－11のような地山の直上に構築された館跡最下層遺構群が検出されるに至り、内郭部の遺構群は一層複雑さを増した。このため、本遺跡は「館城」の歴史的な変遷を端的に示す好資料として、まずこれらの遺構群を各期ごとに分類、整理し、的確に把握することが必要とされてきた。

ところで、この第４次の調査の際に、建物址や溝址などの遺構の周囲が踏み固められたかのように硬質化されている個所が随所にみられ、そしてそれがある程度の広がりを示しながら形成されていることが認められた。また本遺跡の遺構のほとんどはこのうえに構築されていることが確認されたことから、これらは館跡内の人為的な歴史地表面ではないかと考えるに至った。すなわち、館跡の各期の遺構はその基礎となるべき地表面を整地してから構築しているという推定のもとに、逆にこの整地された地表面の究明こそが郭内の複雑に重複する遺構群の分類整理を容易にし、ひいては館跡の歴史的推移を把握することができると考えたのである。

なお、その際われわれはこうした当時の生活の場としての機能をもつ歴史地表面あるいは空間を、仮に「面」と呼称し、把握しようと試みてきたところである。

今回行われたＤ区の調査では、このような「面」の的確な分析と把握、そして性格や機能の追究が大きな課題となり、そのため内郭部の遺構を平面的に調査すると同時に「面」そのものの推移の把握のためにトレンチによる断面からの調査も並行して行った。

調査の結果、地表下30～50cmのところに一面、50～70cm、70～90cmのそれぞれのところに一面ずつ、３つの「面」を確認することができた。また、「面」の構造には土層の上部が１cm程度硬く締まったものと、粘質土や砂、小礫などを交互に重ね合わせて２～15cmほどに、いわゆる版築状に突き固めたものがみられる。「面」と「面」との間層はしまりが少なく、不均一で黄褐色土や黒褐色土などのブロックなどを多く含んでいる。

これら三時期の「面」を土層図に基づいて観察するとＦｉｇ．３のとおりである。この図はＳ４ラインに沿って設定したトレンチの西半部のセクション図であり、図示したように三つの「面」にはそれぞれＳＤ－20、21、29の溝址が構築されているのがみられる。このように本館跡では各時期ごとに「面」の整地、構築をまず行い、そののちにそれを利用して遺構を構築するというのが特徴となっている。

このような人為的に形成された歴史地表面である「面」の使用された時期を、我々は下層から第１期～第３期と便宜上呼称することにした。

第　１　期

館の創立にかかわる時期といえる。遺構は地山である第８層の黄色砂質層を掘り込んで構築されたものが多いが、Ｄ区の一部では第７層などの上部に構築が行われている例もあり、館の構築時に土地の削平等が広範囲にわたって行われたようである。しかし、この期の遺構は溝や礎石などがわずかに確認されたのみで、現時点では郭内の遺構

は大部分が埋没しているため全体的な配置や時期決定などは今後の課題となっている。

第 2 期

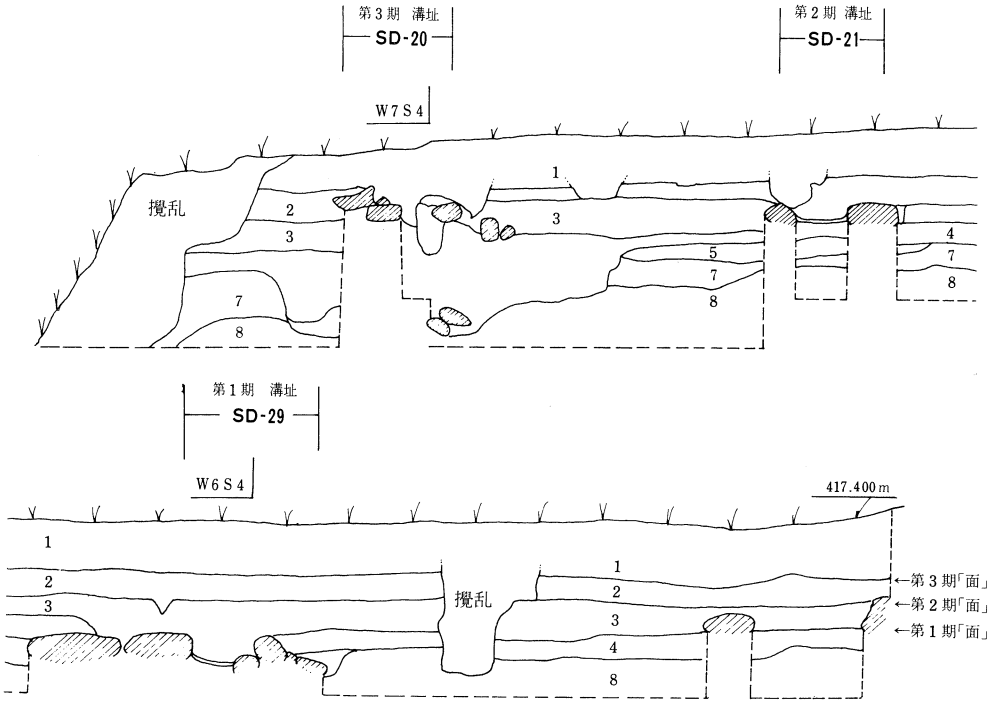
第1期の遺構を黒褐色土（第3層）などで被覆しながら、地点によっては版築技法等を用い、かなりしっかりした「面」の構築が行われているのが特徴である。溝、礎石、水溜等多くの遺構が明らかにされているが、全体的な把握が第1期と同様今後の課題となっている。

第 3 期

館の終焉にかかわる時期といえる。第2期の遺構を茶褐色土（第2層）などでおおい構築している。今日まで行われてきた内郭部の発掘調査はこの期の把握を主眼としたものだが、最上部の遺構群のため部分的に後世の攪乱を受けている。

なお、第1期～第3期の時期区分は、各期の遺構群が各時期ごとに全く新規にすべてが構築し直されていることを意味するものではない。館跡内の遺構の中には部分的な改築、新築の所産のものも想定され、また複数の時期にわたる遺構の存在も十分予測をされているのである。そうした変遷のなかにあってその最も大きな変化、すなわち前時期の多くの遺構を同時に廃棄し、広範囲に埋立て、整地を行い構築する時期をわれわれは館跡創立以後およそ二時期であろうと推察したのである。

また今日までの部分的な層的調査による所見を総合すると、三期を通じてその縄張りにはそれほどの大きな変化は認められなく、はっきり隔絶する積極的な証左は見い出せない。むしろ各期の遺構には、例えば建物址の主軸方向、溝址の重複状況等にみられるように、前構築工法の踏襲の意識が強くうかがわれることも指摘しておきたい。



第1層　表土　耕作土層
第2層　茶褐色土層
第3層　黒褐色土層
第4層　茶褐色土と黄色土の混層
第5層　版築状に突き固めた層
第7層　粘質のある黒褐色土層
第8層　地山　黄色砂質層

（注）
Fig.3および5の土層図中の層位は館跡全体の層序を基本にして序列したものではなく、便宜的なものである。

Fig.3　S4ライン土層図

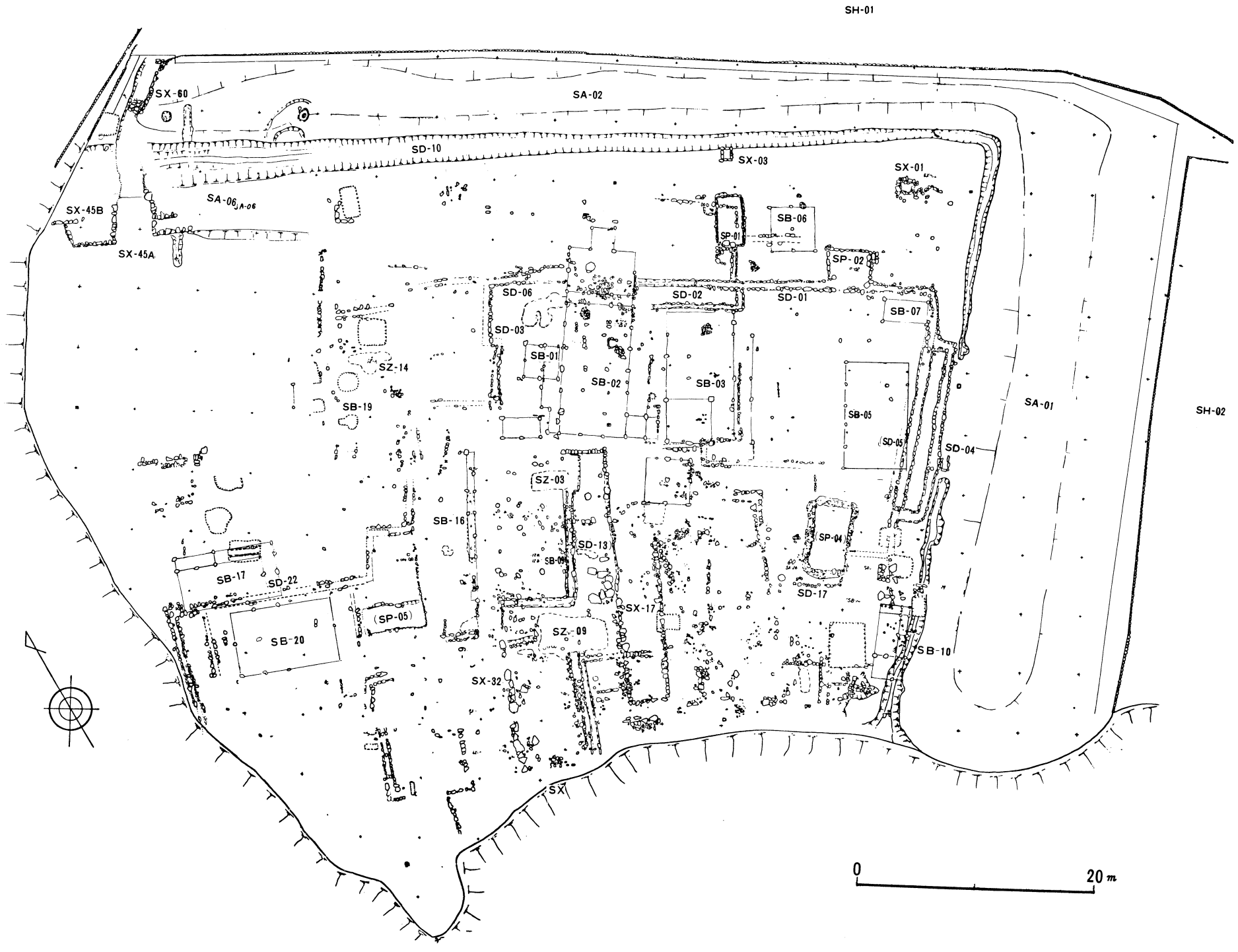

SH-01
SX-60
SA-02
SD-10
SX-03
SX-01
SA-06
A-06
SX-45B
SX-45A
SP-01
SB-06
SP-02
SD-06
SD-02
SD-01
SB-07
SD-03
SB-01
SZ-14
SB-02
SB-03
SB-19
SB-05
SA-01
SH-02
SD-05
SD-04
SZ-03
SB-16
SD-13
SB-09
SP-04
SD-17
SB-17
SD-22
(SP-05)
SB-20
SX-17
SZ-09
SB-10
SX-32
SX
0
20 m

Fig.4 内 郭 部 遺 構 図

4．D区の遺構

(1) 土塁址・土塁脇溝址

ＳＡ－02

館跡の内郭部北側に存在するＡ区から連なる土塁址である。過去検出された土塁址と同様にそのほとんどが削平されており、基底部のみの検出にとどまった。土塁址の幅はＡ区付近で約 6.5m、西方ほど幅が広くなりＳＸ－60付近で約 7.5mを計る。この土塁址は西端を県道で切断されており不明であるが、総延長80mに及び、その一部に門址から続く通路址ＳＸ－60が横断している。

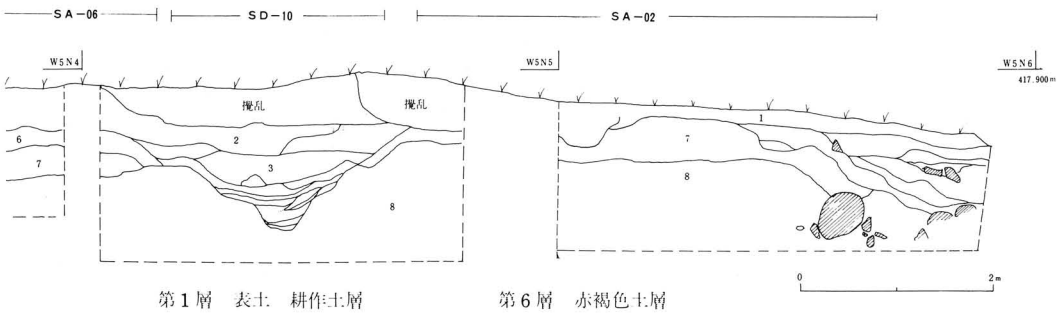
ＳＡ－06

この土塁址は幅４ｍ程で、門址ＳＸ－45Ｂから東にのびるものである。この遺構は館跡内郭部の土層がほとんど人為的であるのに対して、本来の層序を保っており、下部に縄文土器の包含層を残している。またＤ区の第３期「面」はこの土塁址の手前で消失している。このことから、ＳＡ－06の存在が明らかとなり、内郭部は二重の土塁をもつ堅固な防御施設を有していたことが判明した。

ＳＤ－10

土塁の基底部の内側にそって〈V〉形に地山を掘り込み構築されている溝址である。この遺構はＡ区から土塁に並行し連続して存在している。Ａ区との境ではその幅は 2.5mを計るが、西に向かうにつれてしだいに幅と深さを増し、門址付近では幅約4.0m、深さ約 1.5mとなっている。内部はＦｉｇ．５にみられるようにレンズ状に土砂が堆積し、底部は砂礫層となっている。石を利用し構築している溝址が多い本館跡の中

PL.4　土塁・土塁脇溝址



第１層　表土　耕作土層
第２層　茶褐色土層
第３層　黒褐色土層
第６層　赤褐色土層
第７層　粘質のある黒褐色土層
第８層　地山　黄色砂質層

Fig.5　土塁址(SA-02)，土塁脇溝址(SD-10)，土塁址(SA-06)土層図(W5ライン東側)

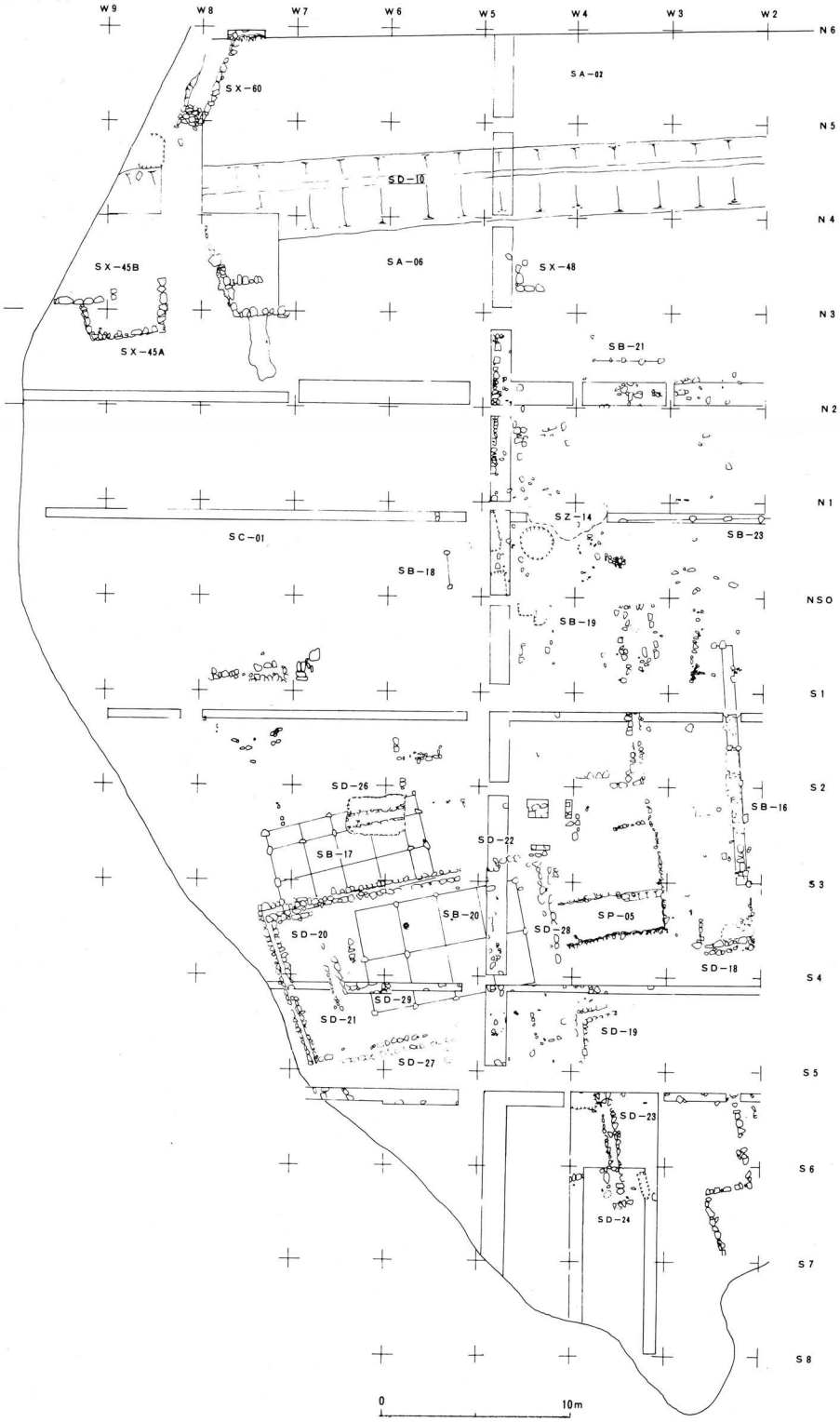


Fig.6 D 区 遺 構 実 測 図

でこの溝址だけはその構造、構築方法を全く異にしている。機能的には土塁と一体化して存在することから、防御並びに排水に利用されたものと考えられる。

(1) 門址・広場址

内郭部のA、B両区において未確認であった本館跡の虎口は、外郭部との関連からD区西北隅が有望視されていた。今回の調査の結果、予期したとおり西北隅から新旧二時期からなる門址が検出された。この遺構は土塁址ＳＡ－02、ＳＡ－06および溝址ＳＤ－10上に構築されているものであり、第３期の所産と推定されるＳＸ－45Ａとそれより古いＳＸ－45ＢおよびＳＸ－60とから構成されているものである。

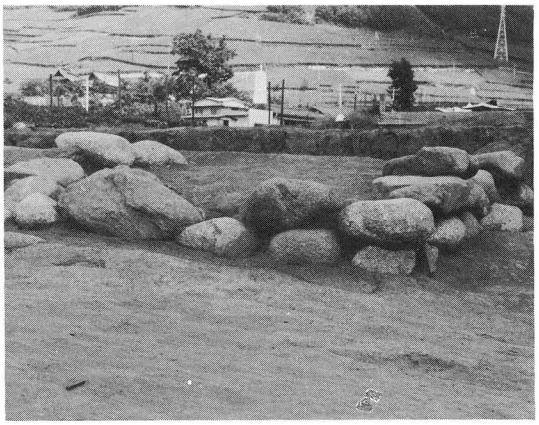
ＳＸ－45Ｂ

判明した遺構は土塁址ＳＡ－06上に築かれた東西一対の石組と通路面によって構成される門址である。石組の現高は約50cm～60cmであり、これにはさまれる南北方向の通路は幅員が約5.0～6.0ｍである。この通路面は土塁を中位まで削りとって中高状を呈し、館跡出入りには若干昇り降りする形態を有している。

ＳＸ－45Ａ

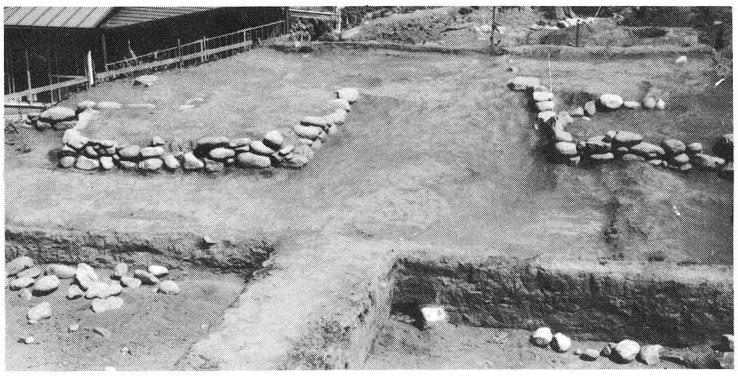
ＳＸ－45Ｂと同様に土塁址ＳＡ－06上に、同遺構の一部を利用しつつ構築された東西一対の石組と通路面による門址である。石組は上部は倒壊しているものの、基部は残存している。現存の石組はＳＸ－45Ｂよりさらに郭内に向って張り出しており、基底部から高さ約50cm～60cmを計る。倒壊、散乱していた石の量から、原形石組の高さは1.5ｍ程度になるものと推定される。

東西石組間の通路面はＳＸ－45Ｂと同様の形状を呈しているが、通路面の幅員は、約3.5ｍ～3.7ｍを計り、ＳＸ－45Ｂの通路面と比較してせばめているのは注目される。すなわち、東部石組は旧築のＳＸ－45Ｂを利用しつつ郭内



PL. 6 門 址 石 組

PL. 7 門 址 石 組



PL. 5 門 址 全 景

PL.8　通路址（ＳＸ－60）

域からは建物址、土塁址、溝址等いかなる遺構も検出されていない。従って、門址から連続する郭内における広場的な機能を果たした区域と言えよう。

(3) 建物址

今回の調査で検出された建物址の礎石列は７個所であり、７棟の建物が存在していたものと思われる。またすでに検出されているものと合せると23棟となるが、これらは３時期に大別され、１時期に10棟前後の建物が存在していたことになる。

Ｄ区の建物址は、判然としないものが多いが、Ａ区のＳＢ－02のようにきわだって大きなものはなく、ＳＢ－07のような小型のものもみられない。またＡ区において建物址の付近に陶磁器類等が数多く検出されたのに比べて、Ｄ区の建物址付近では遺物の出土は少ない。

７棟の建物址は、館跡内郭部における機能と深く関連したものと思われ、広場址を取りかこむように配置されている。

ＳＢ－17

広場址の南辺に主軸を東西に向けた東西8.14ｍ、南北4.53ｍの大きさをもつもので、北辺と東辺に間隔のせまい礎石列がめぐっている。

ＳＢ－18．19

広場址の東辺に配されたもので、攪乱が著しいため規模は明らかでない。残存する礎石から南北に主軸を置いたものと思われる。

ＳＢ－16

Ａ、Ｂ区との境に位置する東西0.50ｍ、南北12.88ｍの細長い建物址である。中央部の約４ｍに

に向って単純に張り出しているのみに対して、西部石組は一部旧築を利用しつつもＳＸ－45Ｂの石組より南へ約1.5ｍ、東へ約2.8ｍ程張り出して築かれており、結果として両石組の間隔をせばめている。このことは館跡第２期から第３期にかけての館跡の構造、性格等の変化を示すものとして重視される。

なお、東部の石組の中に半ば通路面に張り出して径60cm程の門柱の礎石と推定される平らな石が検出されている。これに対応した西側の位置にも礎石の取り除かれたと思われる痕跡が検出されている。

ＳＸ－60

ＳＸ－45ＢおよびＳＸ－45Ａの北、土塁址ＳＡ－02上にあり、二列の縁石とそれにはさまれる通路および敷石からなる遺構である。通路の幅員は約90cmである。この通路は南へのび、溝址ＳＤ－10を埋覆してＳＸ－45Ａの通路面へ続いている。従って、この遺構はＳＸ－45Ａと連続した門址の一部と考えられる。

ＳＣ－01

門址ＳＸ－45Ａの南側に接して、東西約25ｍ、南北約20ｍの広がりをもつ広場址である。この区

PL.9　建物址（ＳＢ－17）

PL.10　建物址（ＳＢ－16）

わたって扁平な小粘板岩を粘土で固めた敷石が見られる。このような構築方法と位置的関係から中門址的な上部構造が推察されている。

ＳＢ－21

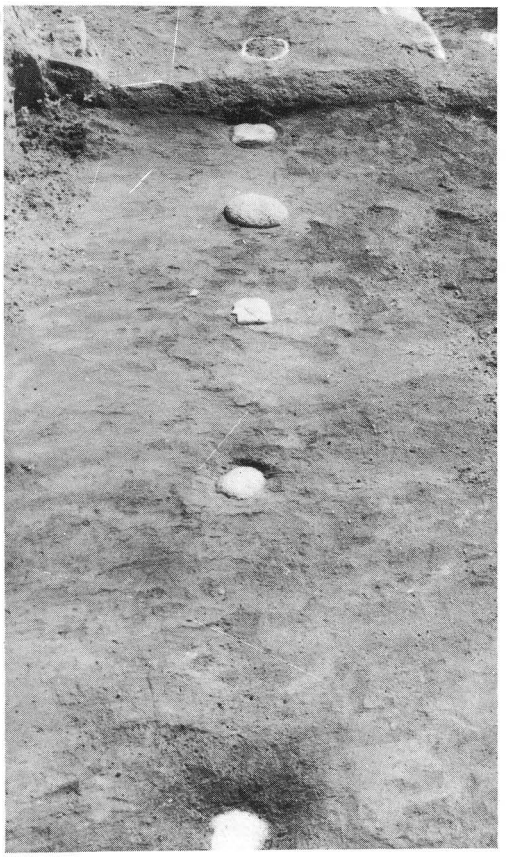
土塁址ＳＡ－06に近接して主軸を東西方向に置いている。礎石は東西約 6.3mに不規則な間隔で一直線に配置されているが、規模等はその多くが未調査のため不明である。

ＳＢ－20

ＳＢ－17の南側に位置し、東西方向に主軸をもつもので、東西8.60m、南北5.50mの規模である。礎石間の距離が東西2.15m、南北2.75mとなり、他の建物址の礎石間距離と比べ、特に大きいものである。これは前述の建物址とは時期を異にするものと考えられる。

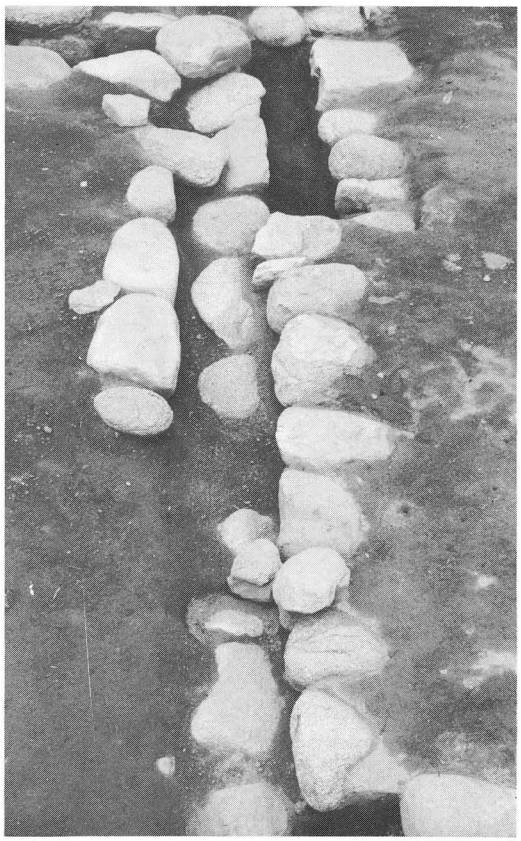
ＳＢ－23

Ｎ１ラインに沿って設定されたトレンチにより検出された礎石列で、規模等は不明であるが、Ａ区まで広がるものと思われる。また時期的には最も古い時期に属するものと考えられている。



PL.11　建物址（ＳＢ－21）

PL.12　建物址（ＳＢ－20）



PL.14　溝址（ＳＤ－22）の重複部

(4) 溝址・水溜址

ＳＤ－22

Ｄ区の中央部を屈曲しながら西流する、縁石を用いた幅0.25～0.50ｍの溝址である。西流するに従って幅がせまくなっており、西端でＳＤ－20に連続している。深さは約 0.2ｍで、底部には鉄分を含んだ砂の堆積がみられる。

ＳＤ－20

縁石を用いた幅0.25ｍの溝址であり、南北に約10ｍほど検出されている。北端はＳＤ－22と連なるが、この部分では溝址やそのほかの遺構など合せて３重の重複関係が認められる。南端は道路により削り取られた斜面に縁石が露出しており、さらに南側に延びていたことが十分考えられる。

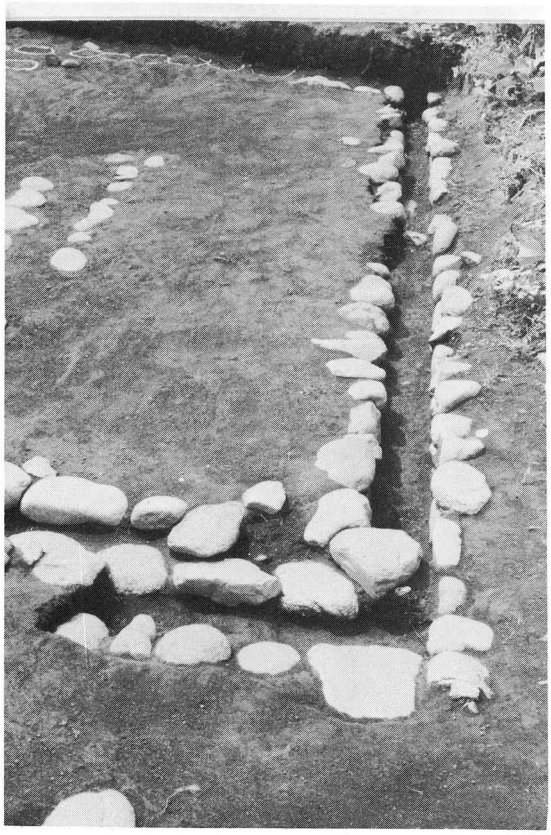
PL.13　溝　址　遠　景

ＳＤ－21

縁石を用いた幅0.3ｍほどの溝址で、ＳＤ－20の東側 2.5ｍの位置に南北に約３ｍほど検出された。両端の連続関係は未調査であるが、ＳＤ－20とは構築された「面」を異にしている。

ＳＤ－26

ＳＤ－22の北側約４ｍの位置に並行している。ＳＤ－22より下位の「面」に構築された溝址で、自然石を３段ほど積み縁石としており、幅 0.4ｍ、深さ 0.3ｍほどで



PL.15　溝址（ＳＤ－20）

ある。底部には粘土が貼られている。

ＳＤ－23

Ｄ区の南半で南北方向に検出された 幅0.3mほどの縁石を用いた溝址であり、ＳＤ－19、ＳＤ－24と重複している。溝の内部は突き固められたようにしまっており、上面のところどころに平石が配されている。

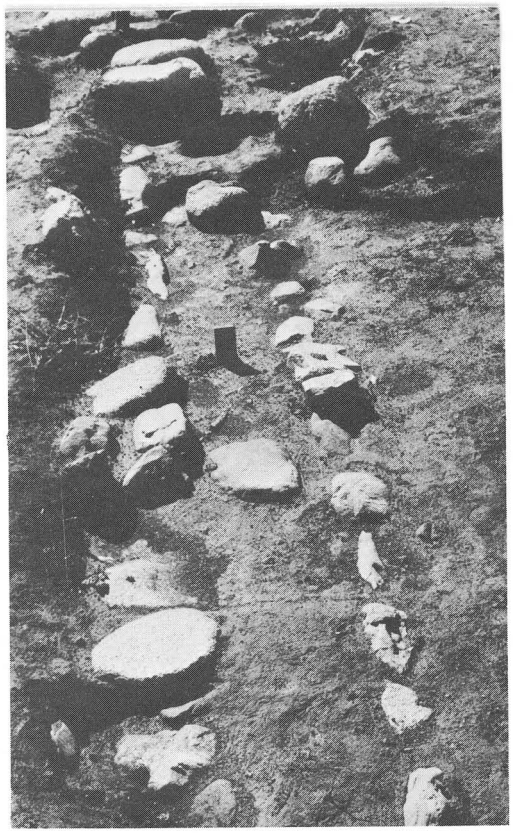
PL.16　溝址（ＳＤ－21）

ＳＤ－27

ＳＢ－20の建物址の南側の地点に東西に検出された溝址である。縁石を用いたものであるが、大部分取り除かれており、その痕跡と北側に残る縁石によって溝址であることが確認された。幅は 0.3m程で、約 7.5m検出されている。西端ではＳＤ－20と重複している。

ＳＰ－05

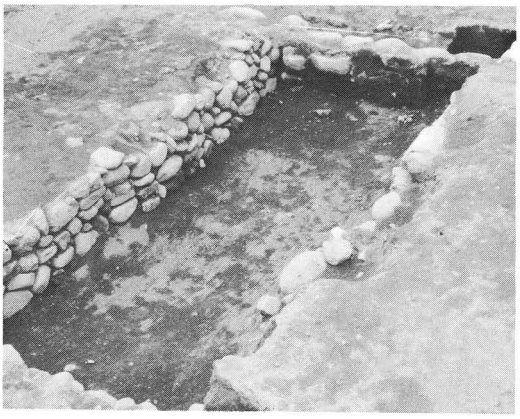
Ｄ区中央部、溝址ＳＤ－22の南側に位置している水溜址である。自然石を「重箱積み」にした高さ80cmの石積みを有している。この遺構は数回にわたって構築しなおしており、主軸方向や法量も変化しており規模等は明らかでない。最終的には埋め立てられ、第３期「面」におおわれてしまう。



PL.17　溝址（ＳＤ－23）

この埋土中からは土師質土器、溶融物付着土器、漆器片・木炭等が検出されている。また底面には鉄分堆積が認められており、水溜として使用されたと考えられるが、水を引き入れた溝は明らかにになっていない。

PL.18　水溜址（ＳＰ－05）

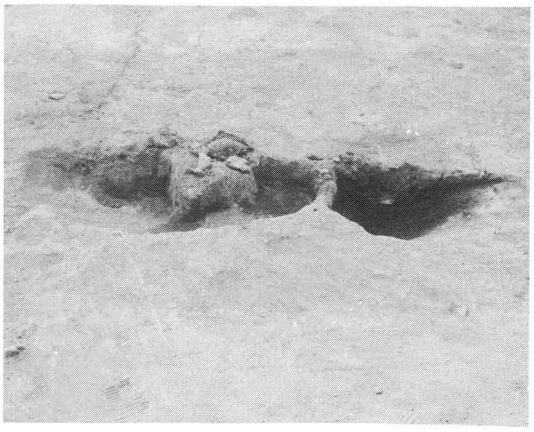


PL.19　水溜址（ＳＰ－05）

(5)　小鍛冶状遺構

溝址ＳＤ－22の南側の建物址ＳＢ－20の上部に金属溶融塊をともなう小鍛冶と考えられる遺構が検出された。

溶融塊の下部には、直径20cm～30cm程の円形プランを呈するすりばち状のピットが2個重複して存在しており、内部には焼土、灰質土を有している。また、これに近接したやや下部より溶融塊をともなわないすりばち状のピットが検出されている。

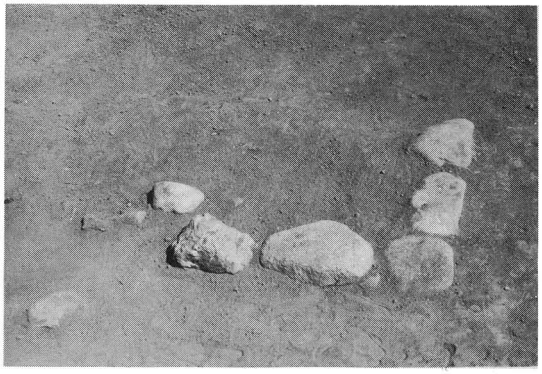


PL.20　小鍛冶状遺構

(6)　その他の遺構

ＳＸ－48

ＳＡ－06の土塁址上部から６個の川原石からなるＬ字形の石組が検出された。この遺構は、今のところ周辺に関連する遺構がみられず、その性格について不明な部分が多いが、枡形を形成する石組の基底部が残存したものではないかとも思われる。



PL.21　ＳＸ－48

ＳＺ－14

種々の岩質の小礫を約４ｍ×２ｍの範囲に敷きつめた遺構である。建物址ＳＢ－19に付随するものとみられる。この種の敷石遺構にはほかに扁平粘板岩や花崗岩の小石を用いたものがある。

5．D区の遺物

(1) 陶 磁 器

D区においては、陶磁器の出土は多くないが、層位的に検出された。その中で長石釉（PL・22）はSB－16の下部の版築状土層中から出土している。稜を有する小片であり、皿形をなすものと思われる。また簡素な印花文のある灰釉陶器は第3期「面」の下層から出土しており、淡緑色の釉のかかった埦形陶器である。A区においても同種のものが検出されている。

PL.22　陶器出土状況

また表土層からではあるが、ひょうそく（PL・23、Fig. 7）が出土している。口径3.6cmあまりの小形のものであり、内部の燈心を支える輪状の支柱は欠損している。釉は淡黄色でベタ底の底部には糸切痕がみられる。

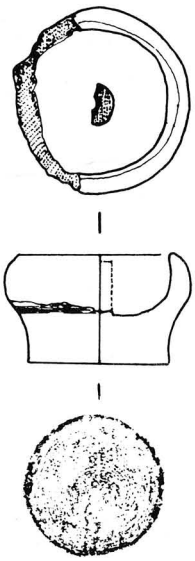
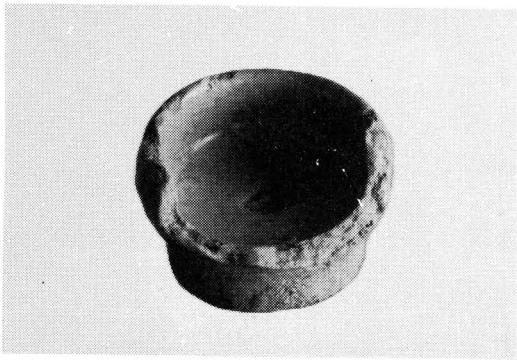


Fig.7 ひょうそく実測図



PL.23　ひょうそく

(2) 土師質土器

土師質土器は、先の概報における第1群および第2群土器の皿形、第3群土器の内湾形の他に耳皿形、足付内湾形の4つの形態が確認されている。

このうちD区においては、皿形土器、内湾形土器、耳皿形土器が出土している。皿形のものについては、A、B、C区と同様に普遍的に見られたが、その量はA、B区などに比してかなり少なく、出土状況もA区よりの部分に偏している。このことはD区における遺構のあり方と密接な関係にあるようである。また皿形以外のものは、それぞれ1点ずつとごく少なく、特殊な遺物として注目される。

皿形土器は、先の概報でもふれたように口縁部などの手法に変化が見られ、また口径や底径、器

PL.24　耳皿形土器出土状況

PL.25　内湾形土器出土状況

高など、大きさによっても何類かに分類されるようである。口径についてみると、13.2cm前後の大型のもの、10.8cm前後の中型のもの、 8.0cm前後の小型のもの三段階と、それぞれの中間的な12.0cm前後のもの、 9.5cm前後のものを加えた五つの大きさのものがみられる。なお、これらには煤などが付着するものもみられるところから、灯明皿としても使用されたであろう。さらに、トレンチによる下層調査を通じて、形態の上に層位的な変化も認められたのであるが、確実な時間差としてとらえるにはまだ検討の余地を残している。

耳皿形の土器は１点だけ第二期の下部から内湾形土器とともに出土している。一般に耳皿は、皿形のものの口縁部を二ヵ所つまみあげているものをさすようであるが、これは四方をつまみあげていて、耳皿と呼ぶべきか若干疑問もある。

内湾形土器は１点検出されたが、これは先の耳皿形土器との伴出状況や表面を黒色にする傾向などの点から祭祀的な要素も予想される。器高はやや高く、胴部の中ほどから内湾させており、内外面ともに黒漆状のものが塗布されている。

(3) 瓦　質　土　器

瓦質土器は完形のものはないが破片が多く検出されている。色調は赤褐色系と灰白色系とに大別できる。赤褐色系のものは胎土中に金雲母と長石粒を含み、灰白色系のものはこれらをほとんど含まない。摺鉢、鉢形土器等で、いずれも日常雑器としての用途をもっていたものと考えられる。

摺　鉢

摺鉢はすべて灰白色系である。いずれも底部および底部付近の破片であり、８条あるいは６条を１単位とした櫛目がみられる。小破片のため条線の全体配置は観察できないが、「米」の字状に８本の条線を交叉させたものがみられる。製作技法は巻き上げ手法を用い、ロクロ成形し、さらに底部付近には指頭による押圧が行われている。

鉢 形 土 器

底部から胴部にかけての破片が検出されている。内側にロクロ成形痕が明瞭に残されているが、外側は更にヘラによる整形がなされている。

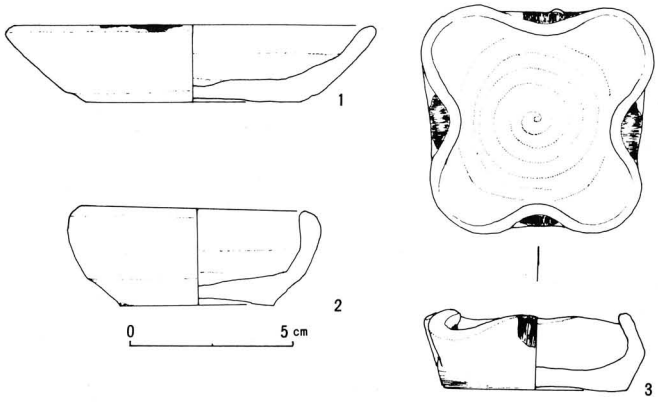


Fig.8　土師質土器実測図

１．皿形　２．内湾形　３．耳皿形

(4) 金 属 製 品

鉄製品が大部分を占め、他に銅製品が検出されている。形態のうえから釘、容器、切羽などがみら

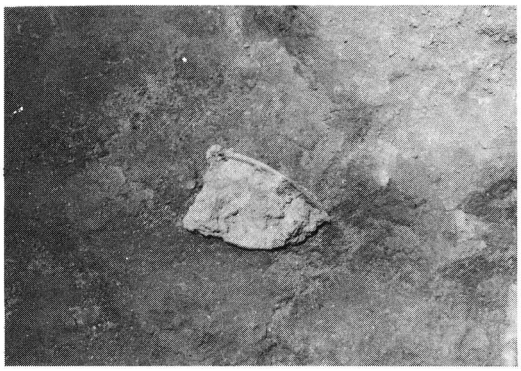
れ、その他金属塊などがある。

鉄　釘

鉄釘は比較的多く検出されている。いずれも長さ３cm～10cm程のもので、断面は方形、頭部は折頭のものが多い。建物址付近から多く検出されているが、礎石などほとんどみられないところにもみうけられる。

鉄製容器

門址西側より口縁部から胴上部にかけての破片が１点検出されている。破片の形状から径８cm程度になる。胴部はほぼ垂直にたちあがり、口縁部は直角に外折している。



PL.26　鉄製容器出土状況

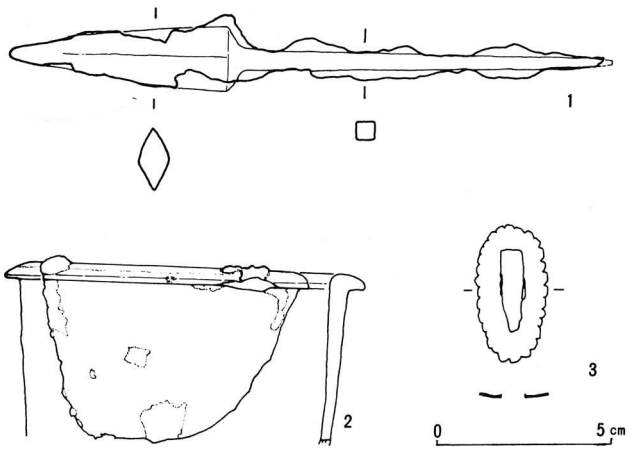


Fig.9　金属製品実測図　　1.鉄鏃　2.鉄製容器　3.切羽

切　羽

表採資料である。銅製で片面に黒漆をぬり、周囲には刻み目を施している。

鉄　鏃

腐蝕が著しいが全長17.3cmを計る鉄鏃である。身の断面は菱形をなし、鎬をもつ細作りである。茎は10.6cmあまりで断面は方形である。

その他の遺物

鉄片と小鍛冶状遺構から検出した金属塊がある。鉄片は幅3.5cm、長さ８cmのもので、二つ折りにした状態で検出された。用途は不明だが、蝶番の一部であろうか。

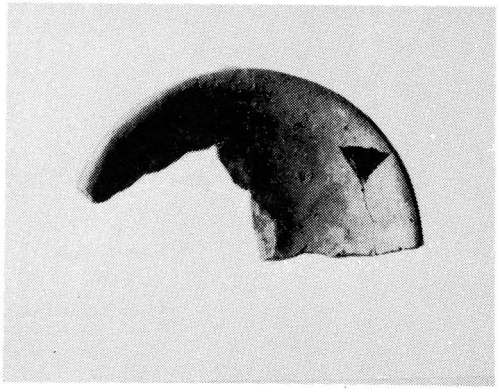
(5)　溶融物付着土器等

ここで述べる遺物は、金属質溶融物が付着した土師質土器と金属溶融塊である。

溶融物が付着した土師質土器は高熱の溶融物が付着したため変質し、硬質化しており灰白色を呈するものが多く、いずれも皿形土器で、特にＤ区では数多くの破片が出土した。出土地点がＳＰ－05遺構を中心にＷ３～Ｗ５ラインにかけての溝址に集中していたことは性格を知る上で興味を引かせることである。

また、金属溶融塊は建物址ＳＢ－20の上部より、５×５cm程のかたまりが二.三個、一ヵ所に集中して出土した。

これらの溶融物がいかなる金属であるかは、現在分析中であるが、ＳＢ－20の上部より出土した溶融塊は鉄の可能性もあり、また付近の状況は小鍛冶のような施設を思わせるものであり、館跡内部に金属を溶融、加工する簡易的な施設の存在を考えさせるものである。今後、溶融塊と溶融物の付着した土師質土器の関係、そしてこれら溶融物の出土状態と建物址との関係を検討していく必要があると思われる。



PL.27　溶融物付着土器

(6) 漆　器

D区ＳＰ－05より漆器の漆の部分のみが検出されている。本遺跡のような土質条件のところでは、このような遺物が遺存することはまれなことであり、素地はまったく失われている。漆の部分の観察から、素地に布を貼り、その上に黒漆を塗り、更に朱漆で仕上げたものであることが窺われる。

(7) 古　銭

D区の調査の結果、中国渡来銭が散発的に検出された。数は少なく判読可能なものは８点で下表のとおりである。ほかに腐蝕のため判読困難なもの２点と半分以上欠損したもの２点が検出されている。

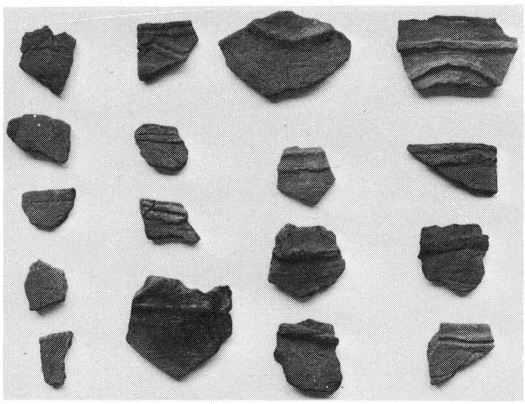
D区出土古銭

国名	銭貨名	西　歴	個数
北宋	皇宋通宝	１０３９	2
〃	嘉祐通宝	１０５７	1
〃	元豊通宝	１０７８	2
〃	元祐通宝	１０８６	1
明	洪武通宝	１３６８	1
〃	永楽通宝	１４０８	1

(8) その他の遺物

館跡の内郭から中世以前の遺物が検出されていることは先の概報でも触れたが、今回のＤ区の調査で中世遺構下部に遺構を伴う遺物包含層が部分的に残存していることが確認された。これらの遺物包含層の残存は初期の館跡構築の様相を知る手

PL.28　土師質土器出土状況



PL.29　縄文土器

がかりとなっている。

土塁址ＳＡ－02上からは縄文時代早期末から前期初頭に位置付けられる土器や石器が竪穴住居址からまとまって検出された。また、溝址ＳＤ－25からは古代末～中世にかかる時期の土器が一括して出土している。

6．付　　記

勝沼氏館跡の重要性については、今回の発掘の成果を振り返ってみると、遺構内容と出土遺物の豊富さなどにおいて、いよいよその価値と重要性が認識されるにいたった。

とくに中世館城の特色の一つである地形利用、二重の堀割と土塁、それを取りまく小路、町割、家臣屋敷、菩提寺並びに氏神などが次第に鮮明になってきたことは、とくに甲斐国の守護大名制から戦国大名制へ移行する、過渡的様相を内包する史跡として、その価値はきわめて重要である。ことに戦国史の場合、文献史料がわりに豊富とされる甲斐武田氏の場合でも、現存文書数－信昌４、信繩９、信虎35、信玄1181、勝頼890、親族62と、その発見数は非常にアンバランスであり、その大半は信玄・勝頼に集中しているのである。それとても戦国期の支配構造、家臣団の組織、軍制、その経済基盤など、必ずしも実態は明確にされてはいない。いわんや親族衆のみならず、主家の信昌－信繩－信虎の時代へかけての歴史的性格、すなわち守護大名制から戦国大名制への転換期の様相は、まったく空白なものといっても過言ではない。

この信玄の時代に先行する歴史的背景が、守護領の伝統の強い石和以東のいわゆる峡東の盆地にあることは、すでに周知の事実であるが、勝沼氏館跡はその一つであり、岩崎氏・小佐手氏・栗原氏などとともに、重要な鍵をにぎっているのである。勝沼氏の菩提寺の泉勝院に、武田信繩・同夫人等の牌子が置かれているのも、それらの関連を秘めているからに外ならない。

本遺跡がおよそ三層にわたる時代の推移を示して検出されたことは、この歴史時代の経緯を示すもので、数の少ない文献史料の空白を埋めるものとして、まことに貴重である。

発掘過程において担当者は、その点をもっとも重視したのであるが、各項にその概略を詳述したように、D地区の発掘において、ほぼその目的を達成することができた。発掘作業は、長い年代にわたっての開墾、あるいは畑作の深耕などにより、著しく旧観を失なっていたのであるが、一口にいってその究明は困難をきわめていたといえよう。しかしながら全国的に見て、中世の諸遺跡の実態は、埋められ、あるいは平坦化されているこのような遺跡が多く、それだけに危機が叫ばれているのであるが、それらを踏んまえた勝沼氏館跡が、しかも保存を前提として、このような成果を上げ得たことは、大きな前進であり、成果といえよう。

発掘技術においては、勿論、中世考古学はその緒についたばかりであるが、われわれはその平坦化された遺構の中から、初期縄張りの実態をさぐり、その上に層位的に重なる建物址・溝址・水溜址・土塁址、その他の層序関係をさぐり、また構築物の再建・取り壊し・機能の変更などを考慮しつつ、とくに版築構造の土層に留意、これを時間差を有する「面」という形でとらえて、ここに中間報告としたのである。

また各項の報告にもみられるように、われわれは甲陽軍鑑あるいは甲州流軍学等の諸資料に扱われている城郭、館などに関する用語例は慎重にかまえていっさい用いていない。それは緒についたばかりの中世考古学の白紙の立場を重んじたからであり、軽々しい用語の引例はかえって弊害になると思考したからである。例えば、われわれは今甲斐国全体の同時期の館、屋敷、山城、砦、烽火台等の調査を並行して進めているが、その検討のなかから慣習による築城用語の使用例の危険を大きく痛感したからである。

なお、以下に内郭部の主な遺構、遺物を一覧表にして示したが、この多くは精査中の段階にあるため、詳細な内容は今後の報告に譲りたいと思う。

〈参　考〉

1．建物址・水溜址・溝址の概要

(1) 建物址一覧表

概要 / 遺構番号	地区	規模(m) 東西	規模(m) 南北	礎石列 東西	礎石列 南北	主軸の方向(磁北)
SB－01	A	2.76	2.68	3	3	N－31°－E
SB－02	A	7.28	17.67	5	11	N－32°－E
SB－03	A	5.49	10.98	4	7	N－30°－E
SB－04	A	*	9.10	1	6	N－30°－E
SB－05	A	5.40	9.09	4	6	N－30°－E
SB－06	A	3.70	3.73	3	3	N－30°－E
SB－07	A	3.75	1.85	2	2	N－123°－E
SB－08	A・B	3.72	3.64	3	3	N－32°－E
SB－09	B	0.90	7.20	2	5	N－26°－E
SB－10	B	* 2.57	6.16	* 3	5	N－36°－E
SB－11	B	* 3.64	* 7.28	* 3	* 5	* N－18°－E
SB－12A	B	* 5.58	7.44	* 4	5	* N－29°－E
SB－13	B	*	*	* 3	* 3	*
SB－14	B	*	*	* 5	* 2	*
SB－15	A	* 3.75	* 1.85	* 3	* 2	*
SB－16	D	0.50	12.88	2	8	N－26°－E
SB－17	D	8.14	4.53	6	4	N－105°－E
SB－18	D	*	* 1.84	*	* 2	*
SB－19	D	*	*	*	*	*
SB－20	D	8.60	5.50	5	3	N－108°－E
SB－21	D	* 6.30	*	* 6	* 1	N－30°－E
SB－22	A	*	*	* 9	* 6	N－118°－E
SB－23	A・D	*	*	* 6	* 1	* N－118°－E

(2) 水溜址一覧表

概要 / 遺構番号	地区	規模(m) 東壁	規模(m) 南壁	規模(m) 西壁	規模(m) 北壁	規模(m) 深さ	鉄分堆積	付属施設
SP－01	A	4.00	2.00	4.05	1.80	*0.90	有	SD－08　SX－12
SP－02	A	2.40	*	2.40	3.40	*0.60	有	SD－01
SP－04	B	*5.50	*2.70	*5.50	*2.95	*0.80	有	*SD－04　*SD－05
SP－05a	D	*5.50	2.45	*	*	0.70	有	*
SP－05b	D	*	5.50	*	*5.80	0.80	有	*

(3) 溝址一覧表

概要 / 遺構番号	地区	規模（m） 延長	幅員	深さ	縁石	鉄分堆積	砂礫堆積	流れの方向
SD－01	A	39.70	0.45	0.40	有	有	無	西
SD－02	A	10.20	0.30	0.16	有	有	無	＊
SD－03	A・D	10.60	0.26	0.18	有	有	無	南
SD－04	A・B	24.75	0.45	0.30	有	有	無	＊
SD－05	A・B	18.80	0.70	0.25	有	有	無	＊
SD－06	A	6.50	0.80	＊	有	有	＊	西
SD－07	A	14.40	0.42	0.15	有	＊	＊	＊
SD－08	A	2.90	0.12	＊	有	＊	＊	＊
SD－09	A	5.10	0.35	＊	有	＊	＊	＊
SD－10	A	16.70	0.80～	0.26～	無	無	有	北
〃	A・D	79.25	～4.00	～1.50	無	無	有	西
SD－12	A・B	22.50	0.60～2.00	＊	無	無	有	南
SD－13	B	18.50	0.45	＊	有	有	有	＊
SD－14	B	11.90	0.40	＊	有	＊	無	南
SD－15	A	6.70	＊	＊	有	＊	＊	＊
SD－16	B	5.50	0.20	＊	有	＊	＊	＊
SD－17	B	4.00	0.30	＊	有	＊	＊	＊
SD－18	D	3.80	0.18	＊	有	有	無	西
SD－19	D	4.60	0.30	＊	有	有	無	南
SD－20	D	10.50	0.25	0.20	有	有	有	南
SD－21	D	2.90	0.30	0.11	有	有	無	＊
SD－22	D	24.90	0.25～0.50	＊ 0.20	有	有	有	南・西
SD－23	D	6.00	0.30	＊	有	＊	＊	＊
SD－24	D	2.10	0.30	＊	有	＊	＊	＊
SD－25	D	2.95	0.60	0.28	無	無	有	＊
SD－26	D	3.20	0.40	＊ 0.30	有	＊	＊	＊
SD－27	D	7.50	0.30	＊	有	＊	＊	＊
SD－28	D	10.20	0.30	＊	有	＊	＊	＊
SD－29	D	2.10	0.30	0.20	有	有	無	＊

注：＊印は未確定数値及び不明。

なお、各遺構には未検出の部分も多いため、表に示した内容は現在までに確認し得た数値である。

2．出土遺物（中世）

(1) 土　器

土師質土器

皿形，内湾形，足付内湾形，耳皿形

瓦質土器

片口，摺鉢，足付内湾形，内・外耳形，壺形，鍔釜，その他

陶　器

灰釉，長石釉，鉄釉，無釉

磁　器

青磁，白磁，染付

土製品

円板，土鈴，碁石状

溶融物付着土器

(2) 金属製品

鉄製品

釘，カナバシ，刀子，鋤先，カナヅチ，ケヌキ，鏃，カギ，金具，容器，その他

銅製品

釘，環，切羽，金具，その他

鉛製品

鉄砲玉

その他

溶融物塊

(3) 石製品

茶臼，硯，砥石

(4) 骨角器

(5) 漆器・木製品

漆器片，建築用材

(6) 古　銭

(7) 自然遺物

動・植物遺体

編集後記

調査概報第１集に続いて、第２集を発刊することができた。今回は第５次、第６次のＤ区における発掘調査の概要が主なものであり、それに参考として遺構、遺物の一覧表を付記させていただいた。ご一読願いたいと思う。

すでに５年目を迎えようとしている勝沼氏館跡の調査も内郭部の調査をいったん終り、外郭部の範囲確認調査を進める段階に至っている。今日、中世の館城はその規模、形態の的確な把握の必要性が強く叫けばれており、また本館跡も予想以上の大規模な様相を呈していることから、その全容の解明に一歩でも近づこうと国、県の指導を得ながら調査を行うものである。なお、この調査が本館跡の究明にとどまらず、中世館城の研究の進展に若干なりとも参考になれば誠に幸いと思う。

内郭部の歴史的な変遷の実証的解明とともに外郭までも含めた館跡全容の把握の両面からの調査、研究が今やわれわれ調査団に課せられた課題となっているが、これらの追究とあわせて遺跡の保存、活用が一層具体化されることを念じ後記としたい。

末筆となったが、調査半ばにしてご逝去された団長野口二郎先生に対し深く哀悼の意を表するとともに先生のご冥福を心からお祈りする次第である。

勝沼氏館跡調査団　名簿

団長代理　植松又次

調 査 員　野沢昌康　上野晴朗　佐藤八郎

服部治則　西宮克彦　広瀬俊将　植松春雄

羽中田壮雄　桂田保　早川方明　折井忠義

清雲俊元　雨宮安洋　渡辺礼一　田代　孝

土屋政司　雨宮　緑　土屋　勇　萩原三雄

小野正文　桜林芳秋　藤本丑雄　池田敏雄

事務局　山梨県教育委員会文化課、勝沼町教育委員会事務局

勝沼氏・武田氏略年表

西暦	日本	勝沼氏	武田氏
1505	永正2		9　武田信昌死去
1507	永正4		4　武田信繩死去
1508	永正5		10　信繩の異母弟油川信恵戦死
1519	永正16		12　信虎甲府へ移る
1520	永正17	「御奉加鳥目百匹武田左衛門大輔信友」（岩殿七社権現棟札）	6　信虎積翠寺に要害城を築く
1521	大永元		11　武田晴信誕生
1526	大永6	「奉再立正八幡宮随神殿之事敬白大壇那武田信虎勝沼氏信友」（石橋八幡神社棟札）	5　一条道場の棟上げ
1535	天文4	8　大輔殿(勝沼 次郎五郎信友)北条氏綱軍と都留郡にて合戦討死(妙法寺記)	6　信虎駿河に出兵
1537	天文6		2　信虎の女、駿河の今川義元に嫁す
1540	天文9		5　信虎、信濃佐久郡を攻略。晴信出陣　(20歳) 11　信虎の女、諏訪頼重に嫁す
1541	天文10		6　信虎(48歳)、子の晴信(信玄)に追放され今川義元を頼る
1542	天文11	10　かつぬま殿、信濃大門峠の合戦の際逸見殿・南部殿・栗原殿・日向大和守と共に諏訪の城に布陣(甲陽軍鑑)	7　晴信、諏訪頼重を幽閉し、ついで自殺させ諏訪郡を奪う
1545	天文14	勝沼の相州の名見ゆ（妙法寺記）	
1546	天文15	10　勝沼氏、上杉憲政の関東勢と笛吹峠(碓氷峠)にて、板垣信方を大将とし小山田、栗原、逸見、おぞ、南部日向、小宮山氏等と共に合戦に出陣（甲陽軍鑑）	この年、勝頼誕生（母諏訪頼重の女）
1547	天文16	10　勝沼殿、信濃海野平における長尾景虎(上杉謙信)との合戦に陣備えの御後として出陣　(甲陽軍鑑)	この年「甲州法度之次第」を制定
1548	天文17		2　晴信、村上義清と信濃上田原に戦って敗れ負傷する
1550	天文19	8　信濃、深志攻略其の他に勝沼衆出陣　(甲陽日記)	
1553	天文22	5　勝沼五郎、信濃桔梗原の小笠原長時との合戦に出陣　(甲陽軍鑑)	8　晴信、長尾景虎と川中島に戦う（第1回川中島戦）
1555	弘治元		第2回川中島戦
1557	弘治3		第3回川中島戦
1560	永禄3	11　「逆心の文あらはれて勝沼五郎どの御成敗」される　(甲陽軍鑑)	

昭和５２年３月３１日

発 行　勝沼町教育委員会
編 集　勝沼氏館跡調査団
印 刷　ヨ ネ ヤ 印 刷